

幕末期日露交流の一面

——ゴンチャロフが見た日本人と日本人の見たゴンチャロフ——

中村喜和

1 作家の宿願

エフィーミー・ブウチャーチン提督のひきいるロシア使節団が19世紀50年代の前半に日本をおとずれた。鎖国政策をとっているこの国を開くことがその目的であった。この使節団の中に作家のイワン・ゴンチャロフが含まれていた。彼は大蔵省の官吏でありながらすでに長編小説『平凡物語』の作者として世に知られていたが、彼自身の希望により、使節の秘書としてこの大遠訪隊に加わったのである⁽¹⁾。

日本にとって、ロシアとアメリカの使節団のほとんど同時の来航は驚天動地ともいふべき事件であった。鎖国政策はすでに2世紀以上もつづいていた。その間、オランダと中国の商船だけが唯一の開かれた港長崎でごく限られた量の交易を行なうことが許されていた。日本人が外国に出ることは死刑をもって禁じられていた。

ロシア使節団と日本人の出会いは二つの全く異質な文化、すなわちヨーロッパ文化と日本文化の衝突であった。それぞれの文化は固有の価値観にもとづいていた。よく知られているように、ブウチャーチン使節は「温厚、丁重、強硬」⁽²⁾をモットーとするねばりづよい交渉の末に、当時の日本の政府たる幕府と友好通商条約を締結することに成功した。しかし本稿の目的はその交渉の過程を跡づけることではなく、ロシア人が日本人をどのように観察し、逆に日本人がロシア人に対してどのような態度をとったかを、日露双方の資料から眺めることである。この目的のために最も役立つのがゴンチャロフの有名な記録『フリゲート艦バルラダ号』であり、さらに日本側の全権たちのつけていた日記である。

作家は別のフリゲート艦ディアナ号によるブウチャーチン提督の二度目の訪日には加わらなかった。バルラダ号をおりとただちにシベリア経由で帰国したからである。読者の立場からは、彼がディアナ号の悲劇的な運命と使節の英雄的な功業に立ち会う機会を逸したことは惜しまれる。もっとも、ゴンチャロフはそれを埋め合わせるかの

ように、のちに「20年後」という補足記事を『フリゲート艦バルラダ号』に付録の形で書き加えたのであった⁽³⁾。

2 ゴンチャロフの目に映じた日本人

ゴンチャロフは日本を「3の9倍の国のかなたの、3の10倍目の国」、つまりひじょうに遠隔の地をあらわすロシア昔話特有の表現で呼び、この国を鍵が失われた玉手箱にたとえている。それは当時の欧米人の標準的な日本観であった。

しかし、それは日本に関する文献が彼らのもとに皆無であったことを意味しない。まず第一に、16世紀の中葉からほとんど1世紀にわたって日本で布教活動を行なったカトリックの司祭や修道僧たちの手になる一群の著述があった。第二には、鎖国時代オランダ商館で働いたヨーロッパ人の手になる記録が知られていた。ドイツ人博物学者E. ケンベル、スウェーデン人学者C. ツンベルク、ドイツ人医師P. シーボルトらがそれである。とりわけシーボルトはまだ存命中だった。彼は50年代の初めにロシアをおとずれており、日本に関する彼の著述はロシアでもよく知られていた。第三には、18世紀の末以来日本を訪れる機会をもったロシア人たちが興味ぶかい記録をのこしていた。A. ラクスマン、I. クルゼンシュテルン、V. ゴロヴニンらの著述がそれである。ロシア使節団は文獻的に交渉相手について可能なかぎりの準備をととのえており、ゴンチャロフはその『フリゲート艦バルラダ号』の中でこれらの三つのグループの文献にしばしば言及している。

けれども作家は、書物による知識にたよることなく、自分自身の体験にもとづいて独自の判断を形成することに努めている。その結果得られた彼の日本人についての観念はきわめてアンビヴァレントなものであった。

まず日本人の外見はゴンチャロフに否定的な印象を喚起した。とりわけ男子の髪型は彼にとって珍妙に感じられた⁽⁴⁾。

二人の日本人は貧しい服装をしていた。広い袖のついた青い上着と、腰回りと両脚にぴったりと合った下衣を着ていた。下衣は幅の広い帯で締められていた。そのほかは？ 何にも着けていない、ズボンも何もかも……履物は、上の方をボタンで留めた青色の短い脚絆であった。親指とつぎの指の間に細紐を通して、藁製の履物の底を足に縛りつけていた。これは富んだ者も、貧しい者も同一であった。頭は顔と同じようにすっかり剃っていたが、後頭部の髪だけを上にまとめあ

げて、削いだような短く狭い髷を結び、脳天に固定している。こんな珍妙で、ぶざまな髪型に、一体どれほど腐心していることか！……

…だが同時に、あの柔和で平べったい、色白の柔弱な顔や、狡猾そうな表情や、チョン髷や、跪坐している有様を眺めて微笑を禁じ得なかった。……

ただ、衣服と例の実際に馬鹿らしい髪型が目ざわりなだけである。……

おおむね利口そうな顔やずるそうな顔は多いが、男らしい精力的な顔つきはほとんど見られなかった。また、かりにあったとしても、こんな具合に後ろから上の方へ結び束ねた髷や、なめらかに剃り上げた顔のために、男らしくなくなっている。

しかし、はじめて接する異邦人の衣服や髪が奇異に感じられるのは普遍的現象である。たとえば、ロシアの画家レーピンによって描かれたサポロージェのコサックの髪型は、奇妙さの点でチョンマゲにひけをとらなかったであろう。

衣服と髪型同様、日本人の表情の乏しさもロシアの作家を驚かせた。

何か彼らの注意を惹くようなことがあれば目をみはり、耳をそばだてるが、またすぐにもとの無関心に落ち込んでしまうのだ。……活発なまなざし、勇敢な表情、生き生きとした好奇心、すばしこさ……こうしたヨーロッパ人が自覚して身につけているすべてのものが、何一つないのである。

ようやくにして、立派な身なりをした老人が眠そうなまなざしで現われ、その後、供の者が従った。老人は私たちの前で歩みを止めて、ものうげに私たちを眺めた。彼らがこの無表情な目つきで威厳を示そうとしているのかどうか、私は知らぬ。

これが果たして兵卒なのだろうか？ 見たまえ、何ということだ。背丈の低い、徴集された日本人たちは小さな漏斗状の漆塗りの帽子をかぶり、眠そうな目つきで立っていた。

広間ごとに奥の方には、立派な衣装を着けた人影が数列になって狭苦しく居並び、喜劇的な威厳を見せていた。眉一つ動かさず、視線一つ流さなかった。これらの人影は、呼吸しているのか瞬きしているのか、彼らが生きているのやら死んでいるのやら、人声もせず、はっきりしなかった。

確実なことは、ゴンチャロフは封建時代の日本人が個人的感情を顔に出すことを極端に嫌ったということを知らなかったのである。「男は三年に一回片頬で笑えば足り

る」というのが当時の日本の社会通念だった。

いずれにしても、いくつかの単純な描線で個々の日本人をスケッチしてそれぞれの特徴を提示する点で、ゴンチャロフは真に芸術家的手腕を発揮している。以下は日本側の四人の全権の第一印象である。

最初に現れたのは、やや膝の曲がった老人であった。彼の口は老齢のためにいつも少し開いていた。続く一人は、年のころ45歳ぐらいの大きな褐色の目をした聡明機敏な面構えの男であった。三番目は非常な老人で、やせて浅黒く、一生を隠遁の内に過ごした人のように視線を伏せて、その顔は幾分小鳥に似ていた。四番目は中年男で、まるでシャベルのように無表情で平々凡々とした顔の持主であった。こうした顔を見ていると、彼が日常茶飯事以外あまり物を考えないことがすぐに読みとれる。

興味ぶかいことに、ゴンチャロフは日本人通詞の中に「手前は何もせずに臥せているのが好きでござる」と告白してまるで自分の小説の主人公オブローモフを連想させるような人物に出会うが、彼に対していかなる共感も示さない。彼が好意を寄せるのは、当時の日本人の間には稀であったシュトリツ的タイプの進取の気象に富む人間だった。『オブローモフ』の作者は怠け者を愛していたわけではない。

ゴンチャロフは日本人が氣力を失ってしまった原因を、長年にわたる鎖国の結果であると見ている。

彼らはみずからそうした制度を立てているので、たとえ拒絶したくなくとも、また一般に前例のないことをしたくとも、たとえそれがよいことであろうと、そうはできない。たとえば、彼らが200年も前に定めた「西洋人は有害だ、彼らとは何一つ共にすることはまかりならぬ」という掟を、今もなお改められないのである。だが、もちろん彼らはすでに、ことに最近、外国人を通すならば、彼らから多くのことを学び得て、生活も向上し、またすべてに練達して、さらに富み、かつ強くなることを認めている。幕府はそれを知っているが、古風な戒めにしたがって、キリスト教は彼らの法と権力にとって有害だと危惧している。よしんば幕府が、そうした迷妄を捨てて、ふたたび外国人と親しくする必要があると腹を決めても、一体どのようにして誰が着手し、誰が提唱するのであろうか。

対外親近に対してあらゆる方策が講じられているので、この国民に私たちの生活を知らせて、ヨーロッパ人の味方に引き込むことは容易ではない。誘惑もなけ

れば迷いもないというが、当局はこれをよく承知していて、いっさいの贅沢な品物、わけても新奇な品の輸入を厳禁している。

ゴンチャロフは日本が鎖国するにいたった歴史的経緯をよく知っていた。

彼らにとって一切が新奇である場合には、彼らは逡巡し、詮索し、待機し、策をめぐらすのである。彼らはある程度まで正しいのではないだろうか。彼らは、従来ヨーロッパ人からよい面よりも悪い面を多く見せつけられてきたのである。とすれば、彼らの排外思想そのものも論理的であるといえよう。ポルトガルの宣教師たちがもたらした宗教を、多くの日本人は信頼して受入れ、そして広めてきた。だが、ロヨラ神父の弟子どもは人間の慾の皮までもいっしょに伝来したのであった。つまり、傲慢さ、権力や金銀への愛着、彼らが途方もなく大量に輸出した見事な日本産の銅に対する欲望、その他キリスト教の愛以外のあらゆる愛慾をもたらしたのである。あげくの果てには、ご承知の通り、日本におけるバルトロメオの夜——つまりキリスト教の大虐殺を招来して、鎖国となったわけである。

日本のこの祖法のおかげでロシアの使節団は長崎入港以来長崎の奉行に会见するまでに1月間も待機を余儀なくされたし、江戸の中央政府から派遣された全権団と交渉を開始するためには奉行との会見からさらに100日以上を空費しなければならなかった。ロシア人は散歩用の上陸地すら与えられなかった。

日本政府は、ロシア人が待つことに退屈して長崎から立ち去るのではないかとすら期待していた。ゴンチャロフの手記にしばしば退屈という文字を見出すのは故なきことではない。

私にとっては、もはやこの極東はさしあたり極端な退屈以外の何ものでもない。

私たちは江戸からの返事を待ちわびていた。仕事をしても退屈だったし、仕事をしなくても——やっぱり退屈であった。

クリミア戦争がすでにはじまっており、ロシアの艦隊はトルコの同盟者たる英仏の強力な艦隊と極東水域で遭遇する危険にさらされていたことも考慮に入れる必要がある。しかしこのような困難な状況にあっても、ゴンチャロフは日本人に対して公平であろうと努めていたのだった⁽⁵⁾。

日本人と事をなす場合には、一応ヨーロッパ風の論理を離れて、ここは極東であるということを念頭におかねばなるまい。前にものべたように、日本の民衆は

頑迷固陋で見込みのない国民ではない。それどころか、論理的で分別があり、必要と認められた場合には、他人の意見でも進んで取り入れる国民である。

日本人の考え方や、言葉使いや、作法が何となく粗野で、風変わりで、ヨーロッパ人を驚かせるようなものだ、などとは考えないでいただきたい。……日本人でもいっこうに変わったところはない。ただ、衣服と例の実際に馬鹿らしい髪型が目ざわりなだけである。そのほかのすべての点では、この民族はヨーロッパ人と比較しなければ、かなり進歩していて、対応も気楽で気持よく、また独特の教養はきわめて注目すべきものがある。

まず目についたのは、中庭や、ござを敷きつめた木造の階段や、それから当の日本人たちのなみはずれた清潔さであった。この点については公平に感服せざるを得ない。彼らはすべて身体も衣服もまことに清潔で、小ざっぱりしている。……役人たちは申すに及ばず、さっぱりして風趣に富んでいる。身分の低い者を見ても、裸体や、破れた衣類であるが、汚点やよごれはないのだ。

彼らのこの無感動の底には、どれほどの生命が、どれほどの陽気さや茶目っ気が隠されていることか！ 才能と天分の豊かさは、ささいなことにも、会話のやりとりにも見受けられる。……日本人はとても活発で素朴である。……彼らは何事によらず詮索し、何でも問い糺し、そしてあらゆることを書きとめる。

だがしかし、上司に対する彼らの尊敬ぶりには、恐れや卑屈さは見られなかった。彼らの作法はもっと素朴で誠意に満ち、温かさや、ほとんど愛情ともいえるものを伴っているのだ、見ていて悪い感じはしない。

3 二つの文化の衝突

二つの異なった文化の衝突はロシア使節と長崎奉行の対面の儀式をめぐる最も典型的に顕在化した。

9月の5、6、7日と毎日のように御検使が私たちを訪ねてきて、こちらの訪問の儀式について打合わせるのであった。こういう場合、ヨーロッパでは行くか行かないかということが問題になるだろうが、私たちは坐るか坐らないか、立つか立たないか、さらにどんなふうにして何の上に坐るかなどということを一月中論じるのだ。

当時の日本人は、儀式にかぎらずあらゆる出会いの場で、高貴な人の前では立った

まま話をするを非常な失礼にあたると思っていた。作家がイソップ寓話の鶴と狐の話の思い出したのは適切だった。このときの儀式は結局、双方の側がおのれの流儀にしたがって、つまり、ロシア側は椅子に腰をおろし（そのために軍艦から水兵たちがわざわざアームチェアをはこんできた）、日本側はたたみの上にすわって会見することで折合いがついた。

全権たちとの初対面の儀式はゴンチャロフにとって幻想的なものであった。

四名の全権たちはみな幅のある上着を着ていた……四人の全員が奉行たちと同じように頭の上に黒い小さな刻面の冠を逆さまに載せていた。この小さな冠は西洋の婦人用の縫物籠か、まあロシアの百姓女が茸狩りに持ち歩く手籠にそっくりの形をしていた。……この程度ならまだ大したことはないが、第三席の全権と二名の奉行ともう一人の役人は、足先から一アルシンも引きずった絹の長袴をはいていた。したがって奉行たちは苦勞して足を上げながら歩くのである。……例の上衣を着て、額には小箱のような冠をいただき、限りもない長袴をはいて、やや俯向き加減に立っている日本人の晴姿を見つめていると、われ知らず、これは、どこかの道化の神が、歩いたり走ったりすることはおろか、身動きもならないように、なるべく不便な装いを人間にさせてやろうという使命感を抱いたのではないかと思われる。

ゴンチャロフはたくまずしていわゆる「異化」の手法を多用している。このときの日本側の高位の役人たちの服装はすでに千年以上も古くから宮廷の儀式のために様式化されたものだった。あらゆる社会的慣習の中で儀式が一番保守的な性格をもつものらしい。しかし国際的な儀礼に関するかぎり、古来の風習は開国とともにじまった急速な西洋化を生きのびることはできなかった。

とはいえ日本においてはまだたたみの上の生活が完全にはすたれていない。公の領分ではヨーロッパ的風習がとり入れられているけれども、生活の私的な面では古い様式が保持されているのである。衣服髪型がその一つの例であって、さすがにチョン髷と腰の刀は明治維新後姿を消したけれども、キモノが完全に消滅したわけではない。日本人の生活は物質的にも精神的にも今なお和洋折衷なのである。

4 日本人の目に映じたゴンチャロフ

日本の政府はプウチャーチン使節のもたらしたロシアの国書を受け取ると、使節と

の会談のために四人の全権委員を任命した。筒井肥前守政憲、川路左衛門尉聖謨、荒尾土佐守成允、古賀謹一郎増がそれである。(ゴンチャロフによる第一印象にもとづく彼らのスケッチはすでに紹介した。)このうち荒尾はいわば監査役であり、儒者の古賀は学術顧問の資格であったから、実質的全権は筒井と川路の二人であった。しかも前者はすでに75歳であったことを考えれば、52歳の川路が日本側の立役者と見てよかった。四人の全権のうち、日記をつけゴンチャロフにも言及しているのは川路と古賀である。

古賀はもともと独占的な権威をもつ幕府付属の学校の教師の家に生まれ育った学者であった。それに対して、川路の経歴は身分が固定化していた当時としてはきわめて注目すべきものであった。彼は最下級のきわめて貧しい武士の子として生まれ、幼いとき幕府直属の微禄の武士の家の養子となった。そして生来の素質と努力によって中央政府の役人の階段を急速にかけのぼり、51歳のときには行政事務官の最高位である勘定奉行に就任した。この役職はその名称から判断すれば財務長官であるが、実質的には司法行政をも兼ねていた。彼より上には名門の世襲的封建大貴族たる老中がいるだけだった。

川路は文学的な教養を身につけており、公務で出張したり首都をはなれて地方で勤務するさい、つねに丹念に日記をつけていた。彼には素人ながら日本語に関する言語学的な論文すらあった。彼の死後その著述は8巻からなる書物として刊行された⁽⁶⁾。ちなみに近代日本の最も有名な詩人の一人たる川路柳紅は彼の曾孫にあたっている。

川路は1853年の秋、40日かかって江戸から1500キロはなれた長崎に到着した。彼の日記によれば、道中の川路は20首以上の和歌を詠み、10篇を越える漢詩をつくっている。和歌は日本古来の短詩であり、日本人にとっての漢詩はヨーロッパ人にとってのラテン語詩に似かよっている。公平に見て川路の詩作品は文学的価値が高いとは思えないが、念のために、漢詩を一つだけ挙げておこう。

羽書頻りに報ず虜船の来るを
笑って旅床に臥し鼾雷の若し
奈んともする無し官途輿論の囂しきを
星奔暁を侵して瓊崖に向かう

この詩の中で彼は未曾有の国家的大事を前にして自分がいかに平静であるか強調している。ゴンチャロフは明らかに日本人に対して優越感をいだいていたが、川路もまたヨーロッパ人一般に対してあまり根拠があるとは思えない優越感をいだいていたこ

とがこの詩から明らかである。

川路は当時の幕吏の中で最も賢明な人物とみなされていた。しかし、それでも彼は200年つづいた鎖国政策を撤廃することは時期尚早と考えていた。将来は不可避としても、まだこの段階では、自分が生きているうちに諸外国と貿易をはじめべきであるとは思わなかったのである⁽⁷⁾。

さりとてヨーロッパ列強に武力をもって対抗することも不可能なので、外交上の話合いで交際を拒否する以外に途はないと考えた。それは同時に日本政府の方針でもあった。彼はこの政策にそってプウチャーチンと会談を行ない、さしあたっては、最恵国待遇の約束を与えただけで、ロシア使節を長崎から退去させることに成功するのである。

川路はゴンチャロフに次のような印象を与えた。

この川路を私たちは皆気に入った……川路は非常に聡明であった。彼は私たち自身を反駁する巧妙な弁論をもって知性を閃かせたものの、なおこの人物を尊敬しないわけにはいかなかった。彼の一言一句、一瞥、それに物腰までが——すべて良識と、機智と、炯眼と、練達を顕わしていた。叡智はどこへ行っても同じことである。民族、衣装、言語、宗教を異にし、人生観まで違うにせよ、聡明な人々には共通した特徴がある。愚者には愚者の共通点があるように⁽⁸⁾。

一方、ゴンチャロフを含むロシア人たちは川路の目に次のように映じた。

使節プーチャーチン、この人第一の人にて、眼ざしただならず。よほどの者也。船将ウンコーフスキ、これは至て穏当なる人にて、いつも笑い居る也。懸合事に少も拘らず。船将次官ポスシュェット、これは蘭語に通じて、今般の通弁みないたし、諸懸合引受け也。一通りの極才子也。ゴンチャロフ、此人無官なれど、セキレターリスのことをなす、公用方取扱というがごとし。常に使節の脇に居て、口出しをするもの也。謀主という躰にみゆ。ポスシュェット、ゴンチャロフはわれに船中にて酒の酌などをし、食物もちこびて、取もちたるもの也。

これに反して、川路の同僚の古賀はその日記の中でゴンチャロフを一再ならず「大腹夷」と呼んでいるが⁽⁹⁾、この作家の外面的な描写にとどまっている。長崎からロシアの友人に送った手紙によって、ゴンチャロフが航海中肥満になやまされたことがわがっている⁽¹⁰⁾。運動不足の結果にちがいない。

ロシア使節と日本側全権との最初の出会いは奉行所で行なわれた。二度目は、相互

性という外交上の慣習にしたがい、ロシア側が日本の全権団をバルラダ号に招いた。日本の役人にとって外国の軍艦に乗りこむのは最初の体験であった。彼らはバルラダ号がそのまま出帆して自分たちを外国へ連れ去るのではないかと心配した。そのため決死の覚悟をきめて招待に応じたことをロシア人たちは知らなかった。

川路はこのときある冗談をいった。ゴンチャロフはそれについてこう書いている。

何やらクリームのような軟らかい生菓子が、ビスケットといっしょに出された。彼はそれを食べてみて、定めしお気に召したのであろう、袂から紙を一枚取り出して皿に残ったものを全部それに移し、一捻りして懐中にしまいこむのであった。

「手前がこれをどこかの美人に持参すると思召さるな」と彼はいい添えた。「いや、これは家来どもに取らせるのでござる」これをきっかけに、話は自然と女性談義に移った。日本人たちは軽いシニズムに陥りそうなところまでいった。彼らはあらゆるアジア民族と同様に官能に耽って、その弱点を隠そうともせず、また責めようともしないのである。

川路自身は自分の冗談のことを日記にこう記している。

もてなしぶりの上手なること、実に驚きたり。異国人、妻のことを云えば泣いて喜ぶという故に、左衛門尉妻は江戸にて一、二を争う美人也。夫を置いて来りたる故か、おりおりおもい出し候。忘るる法はあるまじやといいたるに、大いに喜び笑いて、使節も遠く来り、久しく妻に逢わざること、左衛門尉が如きにあらず、左衛門尉のこころを以て考えくれ給え、と申したり。

これにつづいて川路はこう書いている。ロシアの軍艦を訪問して酒宴で気がなごみ、自信をつけたにちがいない。

詞通ぜねど、三十日も一所に居るならば、大抵には参るべし、人情すこしも変らず候。

彼はこのとき国際理解についてかくも楽観的になったけれども、鎖国の方針をあらためるところまではすすまなかった。彼のような明晰な頭脳の持主にとってすら、因襲の力はそれほど大きかったのである。

ロシア側は一連の会談を終えて長崎を出航する前、再び日本全権団を軍艦に招待して饗応した。その席で次のような出来事があった。まずゴンチャロフの記録を見よう。

食事の途中で、私は川路の手からちょっと扇子を借りて見せてもらった。それは、棕櫚の木でつくって紙を貼った簡素なものだった。私が扇子を返そうとすると、彼は納めてくれと身振りで示した。「記念のために」と栄之助〔通詞〕が彼の言葉を通訳した。私は謝辞を述べた。しかし、もらい放しにしたくなかったので、自分の時計についている金鎖をはずして川路に贈った。彼はちょっとためらったが、通訳の言葉を聞いてから、礼を述べて私の贈物を収めた。……提督は会食後に川路に金時計を贈って、「先程差し上げた鎖につけるために」といい添えた。川路は大喜びであった。彼は会議中でも、こんな贈物を頂きたいとでもいいたように、しきりに自分の厚い不格好な銀時計を見せつけるのであった。それは、ロシアではもはや、村の寺男でも持っていないような代物であった。

川路は同じことを自分の日記にこう書いている。

軍師わが扇子を見て称める故に、汝に与えんといいたるに、通詞を以て、常に御手にふれられ候品を下され、忝なく候由を申し、頓て懐をかかぐりて、トケイを出し、其くさりを取りてわれにくれたり。いかに断りても聞かず。よりてもらいたるに、わがトケイをみせよという故に、僂物赤面なれどみせたるに、其くさりをわがトケイにつけてくれたり。其体をみて、わがトケイを使節見て、時少々違えりとて、ケンを直しくれ、うらを開き、とくと見て返したりしが、頓てくさり有ればトケイなくてはいかが也、奉るらんとて、ベッコウの箱に入れたる、至てうすきトケイくれたり。この事、輿に出たるに似て、左にあらず。扇をくれよかしに申してもらい、その返礼にくさりをくれ、夫よりおもいつきてトケイをくれたれど、帰りて箱を見れば、川路左衛門尉様と申す札を入れて有り。……申合せてかくははからいたる也。恐るべき夷なり。

それから三日後に日本側が送別の宴をはった。川路はその席でゴンチャロフを次のように描写している。

軍師〔ゴンチャロフ〕はよほどシャレものというがごとき風なる男なるが、いささか酒きげん体にて、髯しく頂戴、という手まねをなしたり。其さま、咽の所へ手やり、又頭へ手をやり、やがて頭上へ高く手をさし上げて、うなずきたり。これ、咽までつまりたるにあらず、頭までつまりたり、かしらまでつまりたるにあらず、頭の上へつみあげるがごとくになれり、ということ也。おもわず、其体にみなドッと笑を催したり。

川路自身は封建的道德の体現者であった。1868年徳川將軍家の没落のさい、武士道の作法にかなった自裁をして主家の運命に殉じたのである。

注

ももとはロシア中世文学の研究者であるが、広い視野と深い見識をもって知られるドミトリイ・リハチョフ博士の生誕80年を記念して、モスクワで論文集が編まれた。《Literature and Art in Culture System》の表題をもつ書物が出版されたのは、予定より2年おくれた1988年である。ここに掲げる拙論は「日本人のもとにおけるイワン・ゴンチャロフ」の題目でこの論文集にロシア語で発表したものである。今回、字句の訂正は最少限度にとどめた。日本人読者のためには別の書き方がふさわしいことはわかっているが、わざとスタイルを改めなかった。いずれにしても、本来は外国人のために書いた文章であることは覆いつくせないと考えたからである。

なお、長崎へ来航したゴンチャロフについての日本人の所見に関しては、拙論でとり上げた以外に、新しい史料が最近になって次々と発見されている。「窪田茂遂『長崎日記』について」(『共同研究 ロシアと日本』第2集, 1990)をはじめとする沢田和彦氏による諸論文を参照されたい。またアウチャーチン使節団に関する和田春樹氏の著書『開国一日露国境交渉』(日本放送出版協会, 1991)は拙論で扱ったテーマにもふれていて、非常にすぐれた労作である。

1. ゴンチャロフが海につよいあこがれをいっていたことは彼の回想や親しい友人にあてた手紙から知ることができる。*Собрания сочинений И. А. Гончарова*. т. 7, М., 1954, стр. 239; Б. Энгельгардт. Путевые письма И. А. Гончарова из кругосветного плавания. *Литературное наследство*. т. 22-24, М., 1939, стр. 344./Письмо к Е. А. Языковой/
2. ゴンチャロフの書いた『フリゲート艦バルラダ号』は日本に関連する部分だけが翻訳されていて、『日本渡航記』の名で知られている。ここでは高野明・島田陽訳(雄松堂書店, 1969)を引用している。「温厚、丁重、強硬」のモットーが出てくるのは216ページ。ロシア使節団の態度がベリー提督を長とするアメリカ使節団のそれに比べてかなり友好的であったことは一般的にみとめられている。田保橋潔『近代日本外国関係史』1943, 726ページ; G. A. Lensen, *Russia's Japan Expedition of 1852-1855*. University of Florida Press, Gainesville, 1955, p. 153.
3. ゴンチャロフの日本への旅、ならびに彼の諸作品が日本でどのように受容されたかについては次のような研究がある。K. Савада, Гончаров в Японии. *Japanese Slavic and East European Studies*. vol. 4, Kyoto, 1983, p. 95-109.
4. 以下の引用はすべて上述の高野・島田訳にもとづいている。ページを逐一あげるのはわずらわしいので省く。
5. ロシアでは日露戦争前夜の19世紀末から20世紀初めにかけて日本人を子供っぽく意気地なしとみなす見方が一般的であり、そのような日本人観はゴンチャロフのこの手記に負うところが大きい、とジョージ・レンセンは述べている(前掲書 p. XI)。しかしゴンチャロフは公平さへの努力もおこたっていないのである。
6. 『川路聖謨文書』1-8, 東京, 1934。ロシア使節団との交渉に係るするのは「長崎日記」

と「下田日記」の名で知られるもの。ここでは藤井貞文、川田貞夫校註の平凡社東洋文庫版を参照している。引用した詩は同書の44ページに読みくだしにされたものである。

7. 川路寛堂『川路聖謨之生涯』東京, 1903, 203 ページ。
8. これとはほぼ同じ趣旨の人物評をブウチャーチン提督の公式の報告書でも見ることができる。Всеподаннейший отчет Генерала-адъютанта графа Путятина о плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай 1852-1855 годов. *Морской сборник*. СПб., 1856, №10, отд. 11, стр. 57-58.
9. 古賀謹一郎「西使日記」『大日本古文書 幕末外国関係文書』付録之一, 東京, 1913, 244 ページ。
10. 「私は怪物みたいに太ってしまいました。肝臓をいためたときみたいです」とゴンチャロフは書いている。Энгельгардт, указ. соч., стр. 397. Письмо к Е. П. и Н. А. Майковым.